

複文による連体修飾

—中古の和歌と散文との比較—

佐藤 一恵

—はじめに

和歌において、条件句が用いられるとき、条件・帰結関係で一首が成立する場合と、条件・帰結関係と他の要素との関わりとで一首が成立する場合とがあるが、後者の中の一つに、条件句・帰結句全体で連体修飾句となっているものがある。例えば次のような例である。

① 風ふけば方もさだめずちる^①花をいづ方へゆくはるとかは
見む (拾遺・春・76・貫之)

これは「風ふけば方もさだめずちる」という条件・帰結関係全体で、体言「花」を修飾していると捉えられる。

これまで、接続助詞の問題は、主に前句と後句との意味関係に焦点が絞られてきたが、ここでは、①のように接続助詞の前句・後句ひとまとまりで連体修飾句となっているものを、「複文による連体修飾句」と呼び、特に和歌での用いられ方を中心に扱ってゆきたい。

複文といっても範囲は広いが、接続助詞の用いられたものに限る、今回は、「已然形+ば」「ど・ども」「未然形+ば」「と・も」の用いられた例について見てゆくことにする。

また、以下にあげるような和歌の体言止めなどの例や、散文の引用句の終わりの「こと」の例など、喚体の文となっているものは同列には扱えないと思われるため、今回は除いて考える。

② 君てへば見まれ見ずまれふじのねのめづらしげなくもゆるわ
がこひ (古今・恋四・880・藤原忠行)

③ 又もこむ時ぞとおもへどたのまれぬわが身にしあればをしき
はるかな (後撰・春下・146・貫之)

④ 親君と申すとも、かくつきなきことを仰せ給ふこと、事ゆ
かぬ物ゆゑ、大納言をそしりあひたり。

(竹取・龍の首の玉)

なお、調査の対象は、八代集(『新編国歌大観』所収・「金葉和歌集」は二度本)の短歌の例であり、それと比較するために、『源氏物語(桐壺)』『若紫』(『日本古典文学全集』と、『竹

取物語」「伊勢物語」「土左日記」(以上、日本古典文学大系)を見ている。

二 連体修飾句中に現れる接続助詞

まず、連体修飾句中に「已然形十ば」「ど・ども」「未然形十ば」「とも」が同じように現れ得るかどうかを押さえておく。

結論から言えば、連体修飾句中にはいずれの用例も見出せる。少なくとも散文においては、すべて連体修飾句中に現れ、特に制限はないように思われる。

ただし、現れやすいものと現れにくいものがあり、今回の調査範囲で見出した例は、「未然形十ば」は、以下にあげる五例、「とも」は散文の二例だけで、まだ和歌中の確例は見出せていない。「已然形十ば」や「ど・ども」の例はこの論文中にすべてあげることはできなかったから、それらに比べ用例数はかなり少ないといえる。勿論、調査の範囲を広げれば、もう少し用例数は増えるはずだが、「已然形十ば」「ど・ども」に比べて、用例数が少ないという傾向は変わらないと思われる。

具体的な例は三以下に譲るが、「未然形十ば」「とも」については、用例数が少ないため、ここにまとめてあげておく。

「未然形十ば」

⑤ 風ふかばみねにわかれむ雲をだにありしなごりのかたみとも
みよ
(新古今・恋四・1292・家隆朝臣)

⑥ 命さえあらばみつべき身のはてを忍ばむ人のなまぞかなしき

(新古今・雑下・1738・和泉式部)

⑦ いのちあらば又もあひなむ春なれどしのびがたくてくらすけ
ふかな
(千載・春下・123・中務卿具平のみこ)

⑧ わざとの御学問はさるものにて、琴笛の音にも雲をひびかし、
すべて言ひつづけば、ことごとしう、うたてぞなりぬべき人の御さまなりける。
(源氏・桐壺・地)

⑨ されど、この子もいと幼し、心よりほかに散りもせば、
かるしき名さへ取り添へん身のおぼえを、いとつきなかるべく思へば、めでたきこともわが身からこそ……

(源氏・帚木・心中(空蟬))

「とも」

⑩ いみじき武士、仇敵なりとも、見てはうち笑まれぬべきさま
のしたまへれば、えさし放ちたまはず。
(源氏・桐壺・地)

⑪ いま一方は主強くなるとも、変らずうちとけぬべく見えし
まなるを頼みて、とかく聞きたまへど、御心も動かさずぞありける。
(源氏・夕顔・地)

散文において一応すべての例が見出せる以上、接続助詞によって用例数に差があるのは、表現上の問題であろうが、特に「とも」については、ここで詳しくは述べられないものの、和歌における出現位置等、他の四つの接続助詞とは異なった面も見られ、逆接仮定条件の特殊性が窺える。

では、以上のことを踏まえ、これらの接続助詞がどのようにに連体修飾句中に用いられているか、散文と和歌との傾向を捉えてゆく。

三 散文における複文による連体修飾句

和歌における表現と比較するために、先に、散文の傾向を捉えておく。

まず、どのような体言が修飾されているかという点でみると、『源氏物語』の傾向では、複文によって修飾される体言には、「こと」「ほど」「さま」といった抽象的な語が目立つ。従って、必然的に、修飾句はそれらの具体的な内容を表すことになる。

⑫さならでも、おのづから、げに、後に思へば、をかしくもあはれにもあべかりけることの、そのをりにつきなく目にとまらぬなどを、推しはからず詠み出でたる、なかなか心おくれで見ゆ。
(源氏・帚木・会入馬頭)

これは、どういう「こと」とかという具体的な内容が「げに、後に思へば、おかしくもあはれにもあべかりける」という修飾句によって述べられている。

⑬さもかからぬ限なき御心かな、さばかりいはいはけなげなりしけはひをと、まほならねども、見しほどを思ひやるもをかし。

(源氏・若紫・地)

これも、どういう時かという具体的な内容が「まほならねども、

見し」という修飾句で述べられている。

また二であげた「とも」の例⑩は、光源氏の様子について述べた箇所であるが、これも修飾句の部分は、「さま」という抽象的な語の具体的な説明であるといえる。

それらに比べれば、次の例のように、多少具体的といえる語もある。

⑭いみじうつつみたまへど、忍びがたき気色の漏り出づるをりをり、宮もさすがなる事どもを、多く思しつづけけり。

(源氏・若紫・地)

しかし、この「をりをり」は「ほど」と同じように「とき」を表す語である。

また、次の、空蟬の容貌について述べた⑮の「容貌」や、源氏の横顔について述べた⑯の「御側目」などは、意味的には「さま」を表す語である。

⑮言ひ立つれば、わろきによれる容貌を、いといったうもてつけて、このまされる人よりは心あらむと目とどめつべきさましたり。

(源氏・空蟬・地)

⑯まだ見ぬ御さまなりけれど、いとしく思ひあてられたまへる御側目を見すぐさでさしおどろかしけるを、

(源氏・夕顔・地)

また、二であげた「未然形十ば」の例⑨の「身のおぼえ」なども、やはり、具体的な「物質」を表す名詞ではない。

修飾句は、これらの抽象的な語の具体的な内容を述べているといえる。

『源氏物語』独特の偏りもあるかもしれないため、『竹取物語』『伊勢物語』『土左日記』を見ると、これらの作品では、複文による連体修飾句はそれぞれ四、五例しか見出せないが、その中に「道」「うた」を修飾した例が出てくる。

⑰さて、ほど経て、宮づかへする人なりければ、帰るる道に、やよひばかりに、かえでのみちのいとおもしろきを折りて、女のもとに道よりいひやる。(伊勢・二〇段・地)

この「道」は「道路」ではなく「道中」「途中」の意味で用いられており、やはり、具体的な物質を表した名詞とはいえない。そして、この修飾句の内容はその道に至った事情の説明となっている。

⑱これかれ、くるしければよめるうた、(土左・地)

この場合にも、やはり、歌を詠む事情の説明である。その他、具体的といえるのは、次の『竹取物語』の「我子」、

『伊勢物語』の「女」を修飾している例である。

⑲竹の中より見つけきこえたりしかど、葉植の大ききおはせしを、わが丈たち並ぶまで養ひたてまつりたる我子を、なに人か迎へきこえん。(竹取・かぐや姫の昇天・会入翁)

⑳そこにはありと聞けど、消息をだにいふべくもあらぬ女のあたりを思ひける。(伊勢・七三段・地)

しかし、これらの場合にも、連体修飾句の内容はやはり事情、状況の説明といえるのである。

以上のように、散文では、修飾される体言には、抽象的な名詞が多く、複文による連体修飾句は、全般に、被修飾語の持つ性質を述べるといふよりも、様子や状況を説明するための修飾であり、被修飾語が比較的具体的といえる語の場合にも、やはり、事情・状況を述べる役割を担っている点が変わらない。

散文の複文による連体修飾句は、事情・状況を説明するものであるため、被修飾語には、自然と「物質」を表す名詞が少なくなり、「様子」や「時」などを表す抽象的な名詞に偏ってくるのだとも考えられる。

そして、このように、状況説明的な修飾であるため、様々な状況が想定でき「已然形十ば」による理由表現や「未然形十ば」による未来のことに対する仮定など、散文においては、特に制限もなく、様々な条件句の場合が現れるのだと考えられるのである。

また、

㉑見るめも事もなくはべりしかば、このさがな者をうちとけたる方にて、時々隠るへ見はべりしほどは、こよなく心とまりはべりき。(源氏・帯木・会入馬頭)

ここは、例えば日本古典文学全集では「……違っていました、その間は、このうえなく心ひかれました。」と訳されているように、そこで一旦切れてもよいところが、切れずに連体修飾となって統

いた結果、複文が修飾句中に含まれることになったとも考えられる。次の「日」を修飾している用例など、特に、切れるところが切れないで続いている、という感じが強いと思われる。

②君も、かくうらなくためて追ひ隠れなば、いづこをはかりとか我も尋ねん、かりそめの隠れ処とはた見ゆめれば、いづ方にも、いづ方にも、移ろひゆかむ日を何時とも知らじと思すに
(源氏・夕顔・地)

四 和歌における複文による連体修飾句

では、次に、この散文の傾向に対し、和歌での複文による連体修飾句の傾向を見てゆく。

まず被修飾語であるが、和歌においては、散文の傾向とは著しく異なり、「花」「松」「雲」など具体的な「物質」をさす名詞が中心となる。

そして、それらの名詞がどう修飾されているかという点、まず「已然形十ば」による複文の場合には、次のようになる。

③春たてばきゆる氷ののこりなく君が心は我にとけなむ

(古今・恋一・542・読人しらす)

これは「(被修飾語) とは (修飾句) というものだ」という理解が出来る。つまり、いろいろな氷があつてそのうちの「春たてばきゆる氷」と特定するのではなく、「氷とは春になると消えるものだ」という「氷」の一般的な性質を述べているのである。

一般的な性質を述べた修飾は、散文においては、

④世の中の人の心は、目かるれば忘れぬべき物にこそあめれ。

(伊勢・四六段・手紙)

という「伊勢物語」の例が一例だけ見出せているが、この「物」はいわゆる形式名詞であり、「目かるれば忘れぬべき」というのは「人の心」の一般的な性質であつて、被修飾語である「物」の一般的な性質というわけではない。その点で「春たてばきゆる氷」という修飾とは、別のものといえる。

「ど」の例

⑤年ふれど色もかはらぬ松がかえにかかれる雪を花とこそ見れ

(後撰・冬・475・よみ人しらす)

⑥としふれどかはらぬ松をたのみてやかかりそめけんいけの藤なみ
(千載・春下・120・大炊御門右大臣)

などの「松がえ」や「松」は一般に「年を経て変わらないもの」であり、先の「春たてばきゆる氷」と同様に、修飾句は被修飾語の一般的な性質を述べていると考えられる。

一方、

⑦風ふけど所もさらぬ白雲はよをへておつる水にぞ有りける

(古今・雑上・924・みつね)

の場合の「白雲」は、「風が吹くと吹き払われる白雲の中でふきはられないある特定の白雲」であると考えられる。「ど」による逆接は、「白雲というものは風が吹くと所をさるものである」

という常識、つまり「風吹けば所さる」という一般条件を前提としてゐる。その一般の「白雲」に対し、「風ふけど所もさらぬ」特定の白雲なのである。

②③ つつめども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬめの涙なりけり

(古今・恋二・556・あべのきよゆきの朝臣)

この「ども」の例も、②⑦と同様に、「白玉」というものは、つつめば袖にたまるものであるが、たまらないある白玉」という修飾である。これらは先の「已然形十ば」による複文の連体修飾が「一は」というものだ」ということを表していた、その裏返しである。

「ど・ども」による逆接が、②⑤・②⑥においてはふつうのものは時がたてば変化することに対する逆接であり、②⑦・②⑧は、ふつうの「白雲」「白玉」の性質に対する逆接であるという、二つのあり方が指摘できる。前者の場合には、修飾句は、被修飾語の一般的な性質を、後者の場合には、その一般的な性質を踏まえた特定の性質を述べていることになる。

次に、仮定条件の場合であるが、用例は初めに述べたように二にあげた「未然形十ば」の三例しか見出せていない。この例だけでみると、いずれも、仮定条件とはいっても、未知・不定のことを仮定しているのではなく、⑤の「風ふかばみねにわかれむ雲をだにありしなごりのかたみともみよ」が、

②⑨ 風ふけば峰にわかるる白雲のたえてつれなき君が心か

(古今・恋二・601・ただみね)

の本歌取りでもあるように、「已然形十ば」に通じるところもある条件であり、三例だけで断言はできないが、和歌においては制限があるように思われる。そして、これらも被修飾語の一般的な性質を述べていると思われる例である。

このように、和歌においては、被修飾語の性質を述べることが、複文による連体修飾句の特徴といえる。

被修飾語も、散文に現れたような抽象的な語は、以下にあげるような、「物」の例が数例と「時」の例が一例見られる程度である。

③⑩ つつめどもかくれぬ物は夏虫の身よりあまれる思ひなりけり

(後撰・夏・209・読人しらず)

③⑪ あけぬればくるものとはしりながらなほうらめしきあさは
らけかな

(後拾遺・恋二・672・藤原道信)

③⑫ のぶれどこひしき時はあしひきの山より月のいでてこそく
れ

(古今・恋三・633・貫之)

また、

③⑬ ふればかくうさのみまさる世をしらであれたる庭につもるは

つ雪

(新古今・冬・661・紫式部)

のように物質とはいえない「世」や⑦の「春」などの例もあるが、それらも含め全般に、その被修飾語の性質を述べるものである傾向はかわらないと考えられる。

以上のように、和歌においては、③⑩以下のような例はあるもの

の、複文による連体修飾句は、具体的な「物質」を表す語を修飾し、その被修飾語の持つ性質を述べることが多いというのが特徴といえる。その性質は、被修飾語の一般的性質、あるいは、その一般的性質をふまえた特別な性質であり、それが、修飾句中の条件・帰結関係によって明示されていると考えられるのである。

散文においては、先にも述べたように、文が切れなかった結果、たまたま、連体修飾句中に条件句が含まれたとも見做せるのだが、和歌においては、被修飾語の性質を述べるために、接続助詞が有効に用いられていると考えられる。

五 和歌における複文による連体修飾句の利用

では、和歌において、四で述べた、被修飾語の性質を表す連体修飾は一首の和歌の中でどのように用いられているのか、全体の表現の中で見てゆく。

構文から見ると、被修飾語は、「の」「を」「に」などの助詞を伴って格成分になる例が中心となる。しかし、格成分といっても単なる格成分であることは稀である。

まず、「の」の例では、先の例②③が、「春たてばきゆる水」が「残りなく溶ける」と主格で捉えられると同時に、一般には比喩表現として扱われる「の」である。次の例も同様に考えられる。

②④夏なればやどにふするかやり火のいつまでわが身したもえ
をせむ
(古今・恋一・500・読人しらず)

これらの「の」の場合には、修飾句によって述べられた被修飾語の性質が本質的な性質であるために、喩えられる対象として用いられ、しばしば「―のよう」に」と解釈される比喩の技巧に利用されているといえる。逆にいえば、喩えの対象として用いるために、つまり、その物のどのような点が「君が心」や「わが身」の性質と共通するかを明示するために、普通なら特に述べる必要のない一般的・本質的な性質を取って取り出して表現しているとも考えられるのである。

「なれや」が下接した例

⑤風ふけばとはになみこすいそなれやわがころもでのかわく時
なき
(新古今・恋一・1040・貫之)

なども、「いそ」と「わがころもで」とを対比しているという点で、基本的に同様の関係といえるだろう。

「を」格や「に」格の場合については、次のようなものがある。
⑥ちりぬればのちはあくたになる花を思ひしらずもまどふてふ
かな
(古今・物名・435・遍昭)

⑦としふればあれのみまさるやどのうちにころななくもすめ
る月かな
(後拾遺・雜一・832・善滋為政朝臣)

「を」「に」の場合、それぞれ「ヲ格」「ニ格」として下の句へ続くと同時に、⑥が、「散つてしまえばあとはゴミになってしまふ花」であるにもかかわらず「おもひしらずもまどふ」と捉えられるように、「を」「に」の前後が逆接のような関係になることが多

い。それは、修飾句によって示された性質が変えようのない性質であり、その当然さ故に、それに対する現実の事態の不合理さが明確になり、結果として逆接のような関係になるのだと考えられる。また、そこに一首の和歌を為す感動が生じているのだともいえる。

他に目立つものとしては、「ど・ども」の場合に、「已然形＋ば」には現れていない、「うはうなりけり」という形が出て来る。

②⑦風ふけど所もさらぬ白雲はよをへておつる水にぞ有りける

(古今・雑上・920・みつね)

②⑧つつめども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬめの涙なりけり

(古今・恋二・556・あべのきよゆきの朝臣)

②⑦では、「流」を「白雲」に、②⑧では「なみだ」を「白玉」に見立てていると解されるが、これは、先にも述べた「(被修飾語一般)とは(修飾句)の逆であるが、そうでない特定の(被修飾語)」という修飾の場合に現れる形である。

②⑦の「白雲」は、先に述べたように「風が吹くと吹き払われる白雲の中でふきはられないある特定の白雲」であった。背景の一般論に対し、本来ならそうであるはずなのにそうでないもの、というところに一つの焦点があり、下の句でそれが実は何であるのかを解きあかすという構造となっている。そのためには、その被修飾語に何らかの特例性が必要であり、そこに「ど・ども」の条件が用いられることになるのである。

このように、和歌においては、主に被修飾語の一般的性質もしくは、それをふまえた特定の性質が修飾句で述べられるが、このような、通常は取って述べる必要のない一般的性質を表現することによって、比喩表現では喻える点が明確になり、またある場合には、後の句との間に「そういう性質であるにもかかわらず現実は」という不満感を含んだ逆接的な関係を生じさせることになると思われる。また、一般的性質をふまえた特例性は、その特例性ゆえに「うはうなりけり」の形で「見立て」の表現に利用されているといえるのである。

六 おわりに

以上、複文による連体修飾句を用いた表現について、散文と和歌との傾向の違いを中心に見てきた。

散文においては、文が切れ目なく、どこまでも続くような文章に現れやすく、複文ゆえの連体修飾というよりも、状況説明的な連体修飾であるためにその中にたまたま複文が出てきたというに過ぎないと思われる例が多い。その散文での用法とは異なり、和歌においては、被修飾語の性質を述べるのに用いられるところに特徴がある。それぞれの条件句が活かされており、三十一文字に収めるための無理というよりも、中でも特に一般的性質を述べることに、条件句を用いる積極的な意味があると考えられる。その連体修飾句は、それに続く文の情意を引き出す、あるいは、比喩

として用いられるのに十分な重さを持つことになり、複文による
連体修飾は、その意味で、和歌における技巧の一つと考えてもよ
いのではないかと思われるのである。

付記 本稿は、一九九二年六月二八日の岡山大学言語国語国文学
会における発表に手を加えたものである。

(京都大学霊長類研究所所員)

研究室受贈圖書雑誌目録(一)

(平成四年一月～十二月)

雑誌・紀要

愛文(愛媛大学法文学部) 第27号

青空関係書簡集(親和女子大学国文研究室)

青山語文(青山学院大学日本文学会) 第二十七号

旭川国文(北海道教育大学旭川分校国語国文学会) 第八号

跡見学園女子大学国文学科報 20

いわき明星 文学・語学(いわき明星大学日本文学会) 創刊号

魚津シンポジウム(洗足学園魚津短期大学) 第7号

宇大国語論究(宇都宮大学国語教育学会) 第4号

愛媛国文研究(愛媛国語国文学会) 第41号

愛媛国文と教育(愛媛大学教育学部国語国文学会) 第23号

王朝文学研究誌(大阪教育大学古典文学研究室) 創刊号

大阪青山短大国文(大阪青山短期大学国文学会) 第八号

大谷女子大学国文(大谷女子大学国文学会) 第二十二号

大妻国文(大妻女子大学国文学会) 23

大妻女子大学文学部紀要Ⅰ文系Ⅰ 第24号

邂逅(岡山大学倫理学会年報) 第8号、第9号

解釈 特集「中古」(解釈学会) 十二月号

学習院大学國語國文学會誌 第35号

学大国文(大阪教育大学国語国文研究会) 第35号

香椎渦(福岡女子大学国文学会) 第37号

活水日文(活水学院日本文学会) 23、24、25

活水論文集 日本文学科編(活水女子大学・短期大学) 第三十
五集

金沢大学教養部論集 人文科学編 29―2、30―1

金沢大学語学・文学研究(金沢大学教育学部国語国文学会) 第
二十一号

金沢大学国語国文(金沢大学国語国文学会) 第17号

花葉(花葉)発行所 7

九州大谷国文(九州大谷短期大学国語国文学会) 第21号

京都府立大学学術報告 人文 第43号

金城国文(金城学院大学国文学会) 第68号

近代文学論集(鹿児島大学日本近代文学会九州支部) 第18号

群馬県立女子大学紀要 第12号